

## ワンポイント・ブックレビュー

山住勝広 / ユーリア・エンゲストローム編「ノットワーキング」新曜社（2008年）

産業社会は、ヒト、モノ、カネ、それに情報を大企業や大組織に集中した。人々も自分の夢を大企業や大組織に託してきた。これが企業の国際化や情報化の進展のもとで大きく変わり、組織のあり方や人と人との関係、ひいては社会のあり方をも変えている。中心軸の拡散と多様化、結集濃度の希釈化が進んでいる。

マーク・グラノヴェッター（M.S.Granovetter）のThe Strength of Weak Ties（1973）は転職機会や地域の組織に関する有力な情報が家族や近しい友達などの「強い紐帯」だけでなく時たま付き合う友達などの「弱い紐帯」が大きな役割をはたしているということを実証したものであるし、山岸俊男の「信頼の構造 - ところと社会の進化ゲーム -」（1998年）は、日本が目指すべきは閉じた安心社会から開かれた機会重視の社会とし、この転換の鍵は「人々の間に特定の集団や関係の枠を越えた一般的信頼が醸成されるかどうかである」とみた。これらの仕事はアメリカや日本社会の時代変化を反映しているものと思われる。

そして、グローバル化の一層の進展は、資本と人が動き回り「安定」していたシステムを溶解・流動・再編下におき、目標達成への手掛かりや到達可能性が見えないだけに幸せより不安が先行している。

ノットワーキング（knot working）の研究も、今日の状況への対応のひとつといえよう。この研究の火蓋を切ったのはフィンランドのグループのようである。ノットワーキングについてはつぎのように説明されている。

「多くの行為者が活動の対象を部分的に共有しながら影響を与え合っている分かち合われた場において、互いにその活動を協調させる必要のあるとき、生産的な活動を組織し遂行するためのやり方をいう。……協働でなされる仕事の中で、ノットは結ばれたりほどけたりするが、特定の個人や固定された組織がコントロールの中心になるわけではなく、ノットをそのような存在に還元することはできない。主導権のありかは、一連のノットワーキングにおいて、刻々に変化していく」と。そして、「ネットワーク」や「チーム」との違いは「ネットワークは、通常、組織ユニット間での相対的に安定した『結合の網の目』として理解され、情報システムを共有するなど物理的に固定されていることが多い。また、チームは、産業組織において、協調的な問題解決のユニットとして編成されている。しかし、こうしたネットワークやチームは、活動の分業やルールのあり方、より幅広い組織との境界の引き方の問い直しを迫るような対象に直面したとき、葛藤をもたらし、その限界を見出すことになるだろう。それは、……固定され中心化された活動領域を超え、人やリソースをつねに変化させながら結び合わせていく、脱中心化・脱領域化された仕事や実践の水平的で協働的な生成を指し示しているのである」。

本書は2部・7章から構成されている。1部・拡張的学習のネットワーク。1～3章（境界領域の活動へ - 放課後教育活動におけるノットワーキング、拡張的学習の水平次元 - 医療における認知的形跡の編成、ノットワーキングによる発達環境の協働、コスモポリタニズム、アメリカ文学、外国語としての英語）、2部・即興・多声・記憶のネットワーク。4～7章（即興としての災害救援、多声の空間 - 島団地再生事業の経験から、地震の言語と人間の言葉 - 李村敏夫、記憶のネットワークワーキングのために）。

このなかには、先に紹介したネットワークの「仕事や組織におけるコラボレーションの創発的な形態」を直接紹介しているとは簡単に理解しづらいものも含まれている。しかし、ネットワークによって人や組織が取り組みの展開に伴ない互いに関係を結んだり、ほどいたりしながら問題を解いていく展開は面白い。（白石利政）